

## ヤコブの羊から天の慈雨へ

— 『ヴェニスの商人』における金銭と利殖の変容—

奥山 厚子\*

### **From Jacob's Sheep to Manna from Heaven: The Changing Perception of Money and Profit in *The Merchant of Venice***

Atsuko OKUYAMA

#### **Abstract**

Moneylending was considered a disobedience to God. For Shylock, a Jew, profit earned from moneylending is considered legitimate in the same way as Jacob obtained profit by increasing his number of sheep with God's blessing and tackling his cunning father-in-law Laban with wisdom. Shylock's notion of business is that the money he earns involves his identity and roots, and money is not merely a tool to mediate exchanges and store wealth. The play's depiction of Jewish lenders devoted to money and Christians who follow Bible-based thinking is often perceived as the latter's victory. However, Shylock's money, a product of Jacob's business philosophy, is also used by Christians to clean up their "debauchery" and invest in greater profits. In the story of the money transfer from Jews to Christians, Antonio's application for a loan was considered an act of greed and hatred. After the transfer of money from Shylock to Lorenzo and Jessica through the trial, the money came to be called "manna," the holy rain from heaven, transforming it into Christian charity. However, in the fall of the Jewish usurer who refuses to show the Christians mercy, there is a hidden criticism of the Christians' speculative moneymaking.

キーワード：貨幣, 高利貸し, 利殖, ヤコブの羊, マナ

#### **1. はじめに**

シェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) の作品で唯一ユダヤ人高利貸しが登場する『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*, 1597年頃執筆)では、シャイロック (Shylock) がキリスト教社会から悪魔として排除され、貸金の場面においては、キリスト教徒の商人とユダヤ人の金貸しが明確に対立項に置かれている。イングランドではユダヤ人は数世紀前から公式には存在していないことになっていたが、マラーノ (marrano) と呼ばれるスペイン、

---

\* 名古屋女子大学非常勤講師

ポルトガルから移ってきた隠れユダヤ教徒がごく少数いたことが知られている。そのような状況でシェイクスピアやマーロウ (Christopher Marlowe 1564-93) など当時の劇作家が現実のユダヤ人をどの程度知っていたかは定かではないが、“The devil can cite Scripture for his purpose.” (1.3.94)、“Certainly the Jew is the very devil incarnation” (2.2.24) など、作品中では至る所でシャイロックは悪魔呼ばわりされ、高利貸しである彼はもはや人間の姿をした悪魔のように扱われている。<sup>(1)</sup> 利子を取らずに金を貸し、友人のために命を差し出すことさえ惜しまないアントニオは慈愛に満ちたキリスト教徒であり、反対にシャイロックは慈悲の欠片もない強欲なユダヤ教徒と捉え、本劇にはキリスト教教的価値観のユダヤ教教的それへの優越が表れていると見ることもできよう。中世以来のキリスト教会の教えでは、貨幣はそれ自身では富を生み出さず、時間は神のみに属する物で、時の経過で利子を取ることは、あらゆる教会法に反し、自然に逆らい、神に背くものであり、金貸しというだけで悪魔呼ばわりされてきた (Tawney, Religion 43, Hawks 147-48, アタリ 209)。しかしシャイロックにとっては、貨幣によって利子を得ることは商行為による正当な利益である。それ故に、本劇を資本主義の萌芽期に旧来の価値観に捕らわれ金銭に対する対応を誤ったキリスト教徒が、金銭に対して柔軟な対応が可能であったユダヤ教徒との社会的な軋轢と読む研究もある (西尾 91)。

ユダヤ教徒とキリスト教徒間の利殖に関する認識の違いについては様々な研究がなされてきたが、彼らの間に横たわる金銭そのものについては、利殖というものに対する宗教間の認識の違いについて述べるに止まる。シャイロックの利殖への認識について、ジョン・グロス (John Gross) は、著書 *Shylock: A Legend & Its Legacy* (1992) において、ユダヤ民族の父祖ヤコブ (Jacob) は、策略家で道徳的見本ではないが、シャイロックにとってヤコブは守護霊のようなものであるという (43)。その上で、シャイロックはユダヤ人としてどこまで本物なのか、創造されたユダヤ人かもしれないと疑問を呈している (45-46)。またサラ・コーディン (Sara Coodin) は、その著書 *Is Shylock Jewish?* (2017) において、ラバン (Laban) はヤコブの労働の上に自身の繁栄を築き上げ、一方ヤコブは自らの意思で進んで身を粉にして働くことを惜しまず繁栄を築き上げたとした上で、シャイロックはヤコブの増殖スキルを高く評価しており (109)、シャイロックの利殖は合法で、ヤコブが家畜を殖やしたのと変わることはない (110)、と述べている。その上で、アントニオは契約書を三か月後には期限が到来する単なる経済的な協定と見なしているのに対し、シャイロックはヘブライ人の信仰の誓約に近いものとして捉えており (128)、宗教的倫理観が強く出ているのはむしろユダヤ人シャイロックのほうであるとする。

シャイロックはアブラハム (Abraham) の三代目であるヤコブの生き様を、利殖の理想像のように捉えていた。シャイロックはアントニオが彼に貸金を申し込みに来た時、ヤコブが狡猾なラバンに理不尽な仕打ちを受けながらも羊を増やしたことを熱っぽく語る。ヤコブの羊のエピソード (Gen. 25.19-36.43) は、シャイロックが金貸しという生業で資産を増やすことに対する金銭観が最も良く出ている場面であるにも関わらず、先行研究では彼の商売理念から得られた金銭の位置付けについて十分に検討されているとは言えない。本稿では、シャイロックの利殖に対する信念をヤコブのエピソードから紐解き、彼の商売理念を裏打ちしているものはヤコブを師とする創意工夫と機を捉えて実行に移す行動力であることを述べる。キリスト教会の旧来の価値観、そしてユダヤ人金貸しが持つ中世からのイメージが本劇に及ぼしている影響を踏まえた上で、シャイロックが信奉するヤコブの労働理念から得た資金が、アントニオへの貸金、そして裁判を経てどのようにその性格を変えていったのかを論じる。金銭が持つ性格の変容に着目し、シャイロックが儲けた金銭が、キリスト教徒たちにとって都合よく処理されてゆ

く過程には、キリスト教徒の投機的な金儲け、そしてご都合主義への批判が読み取れることを明らかにしたい。

## 2. キリスト教会の貨幣への呪縛

キリスト教徒であるアントニオとユダヤ教徒であるシャイロックとの間には、貸金において利子を取ることへの道徳的見解の相違があることは否めない。この節では、本作品に依然として見られる利子を取ることへの罪悪感と、如何にしてそれを乗り越え貸金の契約に至ったかについて考察する。アントニオがシャイロックに貸金を依頼する場面では、貨幣は不妊で子を産む（利子を生じる）ことが無いということ、隣人へ金を貸す際に利子を取ることが聖書では禁じられているということが、金銭貸借の倫理観に関する争点となってきた（Hawks 48-49, Shell 109, Spencer 147-48）。<sup>(2)</sup> それらは、シャイロックとアントニオとの間の確執の原因として先行研究でも度々指摘されてきた（Yaffe 48-49, Gross 48-49）。

ANTONIO. I am as like to call thee so again,  
To spit on thee again, to spurn thee too.  
If thou wilt lend this money, lend it not  
As to thy friends; for when did friendship take  
A breed for barren metal of his friend?  
But lend it rather to thine enemy,  
Who, if he break, thou mayst with better face  
Exact the penalty. (1.3.125-32)

この台詞からシャイロックとアントニオは日ごろから敵対心を持っていたのは明白であり、敵であるアントニオに貸すことは分かっていることである。それにも拘わらずシャイロックが、“I would be friends with you,” (1.3.134) とわざわざ言う裏には、友人として金銭としての利子は取らないが、他のものならば取れると解することも出来る。アントニオが言う“Barren metal”とは「貨幣不妊説」（大黒 41-42）と言われているもので、金属貨幣は生殖を行う生命体とは違ってそれ自体としては増えもしないがゆえに、微利は自然に反し、神の摂理に反した悪魔の所業であるという考え方である。それはアリストテレス（Aristotle）に由来し、彼は『政治学』第1巻第10章において、貨幣は石のごとき不妊の無生物であるから、生殖・交配を通じて増殖していく動植物とは違い、貸借期間に応じて増えたもの、つまり利子を貸し手は、要求できないと述べている。アントニオは、シャイロックがヴェニスの金利が下がると言って嘆く原因となっているように、利子を取らず金を貸すという中世からの伝統的なアリストテレスの考え方をしている人物として描かれている。シャイロックはアントニオのそのような性格を利用し、“To buy his favour, I extend this friendship” (1.3.164) と友情を持ち出し、金銭での利子を取る代わりに、胸の肉を取るという条件をいかにも友人間の戯言のように記して、アントニオにサインをさせることに成功したのである。

『十二夜』（*Twelfth Night*, 1602）にも道化のフェステ（Feste）が硬貨を見つめて、“Would not a pair of these have bred, sir?” (3.1.48)<sup>(3)</sup> と言えば、ヴァイオラ（Viola）が“Yes, being

kept together and put to use.” (3.1.49) と答え、貨幣を一組のカップルに例え、利子を産ますことを軽妙に語る場面がある。このように他の作品の中には、もはや貸金から利子が生じることを、中世来の不道德な事として捉えるのではなく、貨幣を有機物のつがい同様に扱うことを、面白おかしく丁々発止のやり取りをしている場面もある。

金銀が子を産むという喩として使われているが、その他にも次のように無機物が対になって登場する。次はシャイロックが自分の資産である金袋や宝石を娘が駆け落ちするときに持ち逃げされたことを、サラニオ (Salanio) が話す場面である。

SALANIO. A sealed bag, two sealed bags of ducats,  
Of double ducats, stolen from me by my daughter!  
And jewels, two stones, two rich and precious stones,  
Stolen by my daughter! (2.8.18-21)

“two sealed bags of ducats”、“two stones”はいずれも無機物であるが、対で登場する。それは娘がキリスト教徒のもとへ逃避し、やがてはキリスト教徒の子を産むであろうことと同様に、シャイロックの資産もキリスト教徒の手に渡りそこで増殖することが暗示されている。

貨幣は不妊であり子を産まないという教会の教えと並び、利子の発生を否定する教えに、時の経過を理由として利子をとってはならないということがある。中世において時間は神のみに属するもの、そして神によってすべての人々に等しく与えられるものと考えられていた。それゆえ徴利が金銭貸借の期間ゆえに生じる利益であるとすれば、それは神のみが所有できる時間を売る罪深い行為となる。一旦、利子付き貸しがなされると、その金は神の定めた安息日も関係なく働き、利益を出し続ける。貨幣に利子という子を産ませ、神による暦の掟を無視して日夜金銭に働かせることは神に逆らう罪なのである。ユダヤ教徒にとって安息日は重要であり、命をかけて守るものであることが「出エジプト記」に記されている。

Ye shall keepe the Sabbath therefore: for it is holy unto you: Every one that defileth it, shall surely be put to death: for whosoever doth any worke therein, that soule shall be cut off from amongst his people. (Exod. 31:14)<sup>(4)</sup>

三ヶ月という期間が設定された貸金に対して、シャイロックは “take no doit / Of usance of my moneys,” (1.3.136-37) と金銭としての利子を取ろうとはしていない。ところがシャイロックは人肉というペナルティを取り立てることについて、“And by our holy Sabbath have I sworn / To have the due and forfeit of my bond. (4.1.35-36) と安息日を持ち出して、彼がいかに担保の実行を重要視しているかを述べている。

前述の時間の経過に依拠した利子の発生よりも、本劇でしばしば問題とされるのが、聖書の同胞に対する利付き貸しを禁じる次の聖句である。

Thou shalt not lend upon usury to thy brother; usury of money, usury of victuals, usury of any thing that is lent upon usury. Unto a stranger thou maiest lend upon usury, but unto thy brother thou shalt not lend upon usury: that the Lord thy God may blesse thee, in all that thou settest thine hand to, in the land whither thou goest to possesse it.

(Deut. 23.19-20)

“brother”とは同じ共同体に属する仲間同士であり、本劇ではアントニオたちキリスト教徒同士そしてシャイロックや金融仲間のチューバル (Tubal) などユダヤ教徒同士を指す。一方、“stranger”とはヨーロッパ中世においては多くの場合、ユダヤ教徒から見たキリスト教徒であった。なぜならギルドからも締め出され、忌み嫌われた金融を生業とするユダヤ教徒の資金を、事実上キリスト教徒が当てにして借りていたからである。普段アントニオは無利息で金を貸しており (1.3.40)、彼は神の教えを守る慈悲深いキリスト教徒である。金を貸すという行為に関してはシャイロックと対局に置かれているのは明らかである。にもかかわらずアントニオはシャイロックに、「金を貸してくれるなら友人に貸すと思うな If thou wilt lend this money, lend it not / As to thy friends,」 (1.3.127-28) というが、なぜアントニオには友人に貸すといった認識が生まれるのであろうか。返せなくなった時に存分に違約金を取り立てるがよい、という意味もあるが、他に当時のイギリス独特の貸金のスタイルも関係している。16世紀イギリスでは貸金は隣人間で偶発的に行われることが多く、大口の貸金は富農や商人により行われていたが、一般の貸金は隣人間でその場その場に依じてなされていたのである (Tawney, Introduction 87)<sup>(5)</sup>。舞台はヴェネチアであるが、貸金の様態においては当時のイギリスの事情が反映されているといえる。

では利子を取ることの合理性はどこに存在するのであろうか。本来ならば利子の役割は投資貸借における危険負担という概念に求めることができる。アントニオは貿易商人であり、貿易にはリスクが付きものである。

JEW.Ho, no, no, no, no. My meaning in saying he is a good man is to have you understand me that he is sufficient, yet his means are in supposition. He hath an argosy bound to Tripoli, another to the Indies; I understand moreover, upon the Rialto, he hath a third at Mexico, a fourth for England, and other ventures he hath, squandered abroad. But ships are but boards, sailors but men: there be land-rats and water-rats, water thieves and land-thieves - I mean pirates - and then there is the peril of waters, winds and rocks. The man is, notwithstanding, sufficient. Three thousand ducats: I think I may take his bond. (1.3.14-25)

シャイロックが言う“he is a good man”とは、アントニオが保証人として十分に機能することである。だが、アントニオの貿易は、シャイロックが、「投機をまき散らしている」というように、危ういものである。貿易には海賊や悪天候など、リスクが付きもので、アントニオの積み荷が無事に戻ってくる保証は無いことを認識している。しかし、シャイロックが“Supply your present wants, and take no doit / Of usance for my moneys” (1.3.137) と利子無しで、いかにも大事ではないかのように借金に誘う裏には、この契約を取り交わし、あわよくば相手の生殺与奪の権を握りたいという下心があったからである。

### 3. キリスト教徒のシャイロックへの認識

シャイロックは劇中で頻繁に“Jew”と呼ばれ、名前前で呼びかけられているのは僅かである。

このことは彼が一人の個性ある人間ではなく、ユダヤ人としてのステレオタイプとして認識されていることを示していると考えられるが、それはどのようなものであったのだろうか。この節ではアントニオのシャイロックへの呼びかけに着目し、彼のシャイロックに対する認識について考察する。

シャイロックはアントニオに、“You call me misbeliever, cut-throat dog,” (1.3.107) あるいは、“You spurned me such a day; / another time You called me dog,” (1.3. 123-24) と、繰り返し犬呼ばわりされ、ともすれば人間的な扱いを受けていなかった。犬は作品中でどのようなイメージで捕らえられていたのであろうか。聖書に登場する犬については次のような記述がある。「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない。あなたがたは、野で裂き殺されたものの肉を食べてはならない。それは犬に投げ与えなければならない」(Exod. 22.31) と犬は食物や習性ゆえに、汚いものとされた。人を犬と呼ぶことは、はなはだしい侮辱を意味する。そのような犬のイメージを旧約聖書においては、異邦人や異教徒に対して用い、彼らを犬呼ばわりしたのである。すなわち、犬呼ばわりされる人々とは汚れの烙印を押された人々のことであった。さらにパウロは、ピリピ人への手紙において「あの犬どもを警戒しなさい。悪い働き人たちを警戒しなさい。肉に割礼の傷をつけている人たちを警戒しなさい」(Phil. 3.2) という。「肉に割礼の傷をつけている人たち」とは、すなわちユダヤ教徒のことである。ユダヤ人と不浄な犬は同列に扱われており、ユダヤ人にとって、このように犬に例えられることは侮辱的なことであった。<sup>(6)</sup> アントニオが金貸しを生業とするシャイロックを、不浄な動物に例えることの根底には、金は不浄なものであるという潜在的な認識がある。彼がユダヤ人としての扱いに対して人間扱いされていないと訴え、ユダヤ人も感情を持つ一人の人間であることを切々と述べる独白は、ステージ上ではユダヤ人が唯々貶められる役回りとして常態化していた当時としては異色であったといえよう。

アントニオは彼を人間として見ていなかったとの論もある (Shell 69)。シャイロックは人間扱いをされてこなかったとしても、最終的に彼は改宗を強いられている。キリスト教徒への改宗は本来ならば魂の救済を与えるものだが、シャイロックの場合は、“I pray you, give me leave to go from hence. / I am not well” (4.1.391-92) と、改宗は彼に精神的なダメージを与えた。宗教は個人のアイデンティティの中核を成すものであり、相手が動物であるとの認識ならばそれは成立しない。アントニオとしてはやはりシャイロックはキリスト教徒以外の人間という認識である。アントニオたちは、シャイロックがあくまでも自分たちとは異質な存在であることを求めているのである。「犬」、「ユダヤ人」といった呼びかけは、彼らの間の差異を印象付けることで、キリスト教徒の優位を確認しようとする行為であると言える。ユダヤ人だけではなく、ポーシャ (Portia) に求婚に訪れたモロッコ王子、アラゴン王子、またトルコ人、ダッタン人など、作品全体としてヴェネチア人以外の人々は忌避されている。ヴェネチア人の優越は、観客も含めてロンドンの人々のロンドン以外の他都市、他地域、ロンドン在住外国人に対する優越ではないか。<sup>(7)</sup> もちろんステージはイタリアのヴェネチアであるが、根底には女王の都ロンドンがあり、市民にはその臣民としての優越感情があると考えられる。

また、「人殺し犬 (cut-throat dog)」(1.3.107) という表現は、ユダヤ人に対して持たれていた固定概念である血に飢えたユダヤ人を指すもので、『ロンドンの三淑女 (*The Three Ladies of London*, Robert Wilson, 1582)』では、登場人物の「高利貸し (Usury)」が、“No, I'll do nothing but cut thy throat.” (Sec.8 10)<sup>(8)</sup> と言い、困っている人に食事を振る舞い、キリスト教的博愛精神を体現している「もてなし (Hospitality)」の喉をかき切って殺してしまう場

面がある。ユダヤ教徒が喉を掻き切るという表現は、ユダヤ教徒は血を食さないため、血と肉を分けるために、屠畜の際、動物の喉を切って放血を行うことに由来するのではないかと考えられる。『ヴェニスの商人』の裁判の場面で、「証文では血は1滴も与えていない (This bond doth give thee here no jot of blood:)」(4.1.302) とポーシャが言うのはそのようなユダヤの規律を揶揄したものであると言える。当時イングランドにはユダヤ人はそう多くはおらず、実際の彼らの生活について正確に知られていなかったとしても不思議ではない。そのため、金にがめついキリスト教徒の血に飢えたユダヤ人、という古くから持たれていたイメージが本劇でも踏襲されている面は否めない。

#### 4. シャイロックにとって正当な利殖の成果であるヤコブの羊

シャイロックにとって、アントニオに対して利子を取ることは、商売上の利益以外の目論見があったことは第1節で述べた通りである。では彼は貸金業としての利殖についてどのような考えをしていたのであろうか。利子を付した貸し借りはしないというアントニオに対し、シャイロックはヤコブの羊のエピソードを出し、利殖は当然のことであると訴える。このヤコブの羊の話はのちにアントニオが“The devil can cite Sculpture for his Purpose” (1.3.94) というように、シャイロックが自分の民族としての威厳を保つために引き合いに出しただけではない。ヤコブの羊のエピソードを通してシャイロックは利子を取ることを、そして商売をして利益を出すことに対する自身の信念を述べているのである。

JEW. When Jacob grazed his uncle Laban's sheep,  
This Jacob from our holy Abram was,  
As his wise mother wrought in his behalf,  
The third possessor; ay, he was the third. (1.3.67-70)

シャイロックはヤコブがアブラハムの“the third possessor”であることを強調している。ヤコブには兄のエサウ (Esau) がいるが、ヤコブは母の助言で、父イサク (Isaac) を騙して兄が受けるはずの祝福を受けた。しかしシャイロックはそのようなヤコブを不道德だと非難する様子はない。エサウは腹が減っているからと、長子の相続権をヤコブに渡すことを条件に、ヤコブが料理していた目の前の煮物を食べることを優先するような短絡的な考えをした人物である。<sup>(9)</sup> シャイロックは自分たちユダヤ人の祖となるべき3代目は衝動的なエサウよりヤコブが相応しいと考えていると解することができる。「ヤコブの杖にかけて (By Jacob's staff, I swear.)」(2.5.35) という言葉の通り、彼は策略家ではあるものの、辛抱強く好機をうかがい、先を見据えた行動をするヤコブを信奉しているのである。

一方、アントニオは、シャイロックが語るヤコブの話に「彼がどうかしたか? (And what of him?)」(1.3.71) と、さして関心がある素振りもない。「利子を取ったのか? (did he take interest?)」(1.3.71) というアントニオの問いに対し、「違う、利息ではない。あなたたちが言う利息そのものでは。(No, not take 'interest', not as you would say / Directly 'interest'.)」

(1.3.72-73)と答える。シャイロックは、ヤコブが得た“interest”とアントニオが考える“interest”とは違うという。アントニオの“interest”とは、当然金銭貸借における利子のことである。そ

れは伝統的な教会の教えでは自然に反し、時間とともに増殖する忌み嫌われた金銭という性格を持つ。

ではシャイロックが考える“interest”とはどのようなものであろうか。彼が話す創世記のヤコブに纏わるエピソードは、彼の金銭観が最もよく表れている場面である。兄弟の確執で父の家に居られなくなったヤコブは、叔父ラバンの下に行く。ラバンの二人の娘のうち、妹のラケル (Rachel) と結婚するつもりで7年間ラバンの下で働いたが、ラバンに騙されて姉のレア (Leah)<sup>(10)</sup>と結婚する。しかし彼はラケルとの結婚を望み、もう7年間ラバンのために働いた。ラバンは働き手であるヤコブが去る事を認めようとせず、報酬を与えるから留まるように説得したのだが、それは生まれる確率が低い毛色の羊をヤコブの取り分とするというものであった。このようにヤコブは結婚の時に引き続き、またもやラバンに理不尽な仕打ちを受けるが、自分の資産である羊を増やす方法を行動に移した。シャイロックはアントニオに向けて話を聞かそうとする。

JEW.                    Mark what Jacob did:  
 When Laban and himself were compromised  
 That all the eanlings which were streaked and pied  
 Should fall as Jacob's hire, the ewes, being rank,  
 In end of autumn turned to the rams;  
 And when the work of generation was  
 Between these woolly breeders in the act,  
 The skilful shepherd peeled me certain wands,  
 And, in the doing of the deed of kind,  
 He stuck them up before the fulsome ewes,  
 Who, then conceiving, did in eaning time  
 Fall parti-coloured lambs, and those were Jacob's.  
 This was a way to thrive, and he was blest:  
 And thrift is blessing, if men steal it not. (1.3.73-86)

ポプラ、ハシバミ、スズカケの若枝の皮をはいで白い筋を作り水飲み場に置いて、さかりがついた家畜に見せるようにした。この当時の人々は、交尾の時に見た色が、家畜の毛色に影響を与えると信じていた。事実、その枝の前でさかりがついた群れは、ぶち毛やまだらのものを産んだ。さらにヤコブは強そうな家畜にはその枝を見せ、弱そうなものには枝を見せないようにした。すると、ぶち毛やまだらの毛の強い者ばかりが生まれ、普通の羊や山羊は弱いものばかりになっていった。“The skilful shepherd”であるヤコブの取り分の家畜の群れは強くなり、ラバンの家畜は弱いものばかりの群れとなっていったのである。ヤコブは長年ラバンの下で家畜の世話をした経験の賜物でそのように家畜を殖やしたのである。シャイロックは、“This was a way to thrive, and he was blest; / And thrift is blessing if men steal it not.”(1.3.85-86) と言っていることから分かるように、家畜は正当に手に入れた成果であり、神の祝福であると考えている。ヤコブは、杖一つでヨルダン川を渡ったが、今では群れ二つの家畜を持つまでになった (Gen. 32:10)。シャイロックは「忍耐は私たち民族のしるしだから (For sufferance is the badge of all our tribe.)」(1.3.106) とユダヤ民族が辛苦を耐え忍んできたことを念頭に



置き、ラバンに欺かれて彼の下で長年働かされたヤコブと自分を重ね合わせていると考えられる。彼はヤコブの成功は神の恵みであると同時に、自分の金貸しとしての儲けも正当な利殖の成果であると考えているのである。

シャイロックにとって家畜は財産であり、子を産ますことは財産を増殖させることであり、それは金銭の利殖となんら変わる事はない。シャイロックが、子を産むはずのない金銭が利子を生じることが、このヤコブの羊が神の祝福により、彼が手にすることが出来る羊を生むのと同じだと考えているのだとしたら、それは貸金業で利子を手にして、己の資産を増やすこともまた神の祝福を受けた結果、というべきである。しかし、自然の営み“the deed of kind”への言及は、自然の秩序に対する人間の干渉と見なされる場合、皮肉なことに、ヤコブが家畜を増殖させることは、ユダヤ人の経済活動が神の摂理に反するということになる。

ではアントニオは、シャイロックが家畜を増殖させることと、金銭の利殖とを同様に考えていることに対して、どのように考えているのであろうか。彼は家畜の増殖と利殖とをシャイロックが大真面目に同列に扱かうことに難色を示している。

ANTONIO. This was a venture, sir, that Jacob served for,  
 A thing not in his power to bring to pass,  
 But swayed and fashioned by the hand of heaven.  
 Was this inserted to make interest good?  
 Or is your gold and silver ewes and rams? (1.3.87-91)

シャイロックの主張に対してアントニオは、ヤコブが希望するような羊や山羊が生まれることは偶然の産物に過ぎず、儲けは不確実であり、そのようなことに期待するのは投機 (venture) ではないかという。またアントニオはシャイロックの聖書の寓意的な解釈に疑問を呈し、“ewes”と“rams”が金と銀の比喩であり、シャイロックの金は子を産むのか、つまり利子を取るのかと問うている。アントニオはシャイロックが牡羊や牝羊を金銀と同様に考えていることに難色を示し、それは利子を正当化するために持ち出したのかと訝っているのである。<sup>(11)</sup> シャイロックは盗みで得た利益でないかぎり、正当な産物であると信じて疑わない。彼にとって貸金業で得た利益は、ヤコブが狡猾な支配者ラバンに対し、知恵と工夫で増やした羊と同様に、神の加護の下、手に入れた正当な利益なのである。そのような彼の商売上の考え方を背景とするならば、彼にとって儲けた金銭は、単に交換を媒介し、富を貯蔵するための通常金銭ではなく、遠く彼のルーツにたどり着く、彼のアイデンティティを包摂した言わば彼の分身ともいえるものである。

職業上の利殖に関して誇りすら持っているシャイロックに対して、アントニオの商売上の儲けに対する考えは、あくまでも利他の精神に満ちたものである。アントニオがシャイロックに向かって言った“venture”とは、リスクを承知で大きな利益を追求するもので、劇冒頭でアントニオの友人ソラニオ (Solanio) もまた、貿易のことを“venture” (1.1.14, 20) と呼んでいる。“all my fortunes are at sea” (1.1.177) とアントニオの持てる金はすべてが次の投資につき込まれている“ことがわかる。アントニオは利息を付さずに金を貸し、シャイロックはヴェニスに利率が下がりっぱなしだと嘆く。親友バサーニオ (Bassanio) のためには更なるリスクも厭わず、“Try what my credit can in Venice do,” (1.1.180) と保証人を買って出ており、彼にとって金銭とは慈悲を施す手段であり、貨幣の増殖を喜び、損失を嘆く、といった商人にありがちなエ

ピソードを見ることはできない。彼は、自己犠牲の精神のもと、金を通して人助けすることに自己の存在価値を見出しているのである。

## 5. 移動するヤコブの羊

シャイロックが理想として追い求めてきたヤコブの例に倣った努力の結果である金銭は、最終的に彼の手元に残り増殖を続けることはなく、娘が介在することによりキリスト教徒に渡ってしまう。皮肉にもシャイロックはラバンが娘に裏切られたのと同様に、娘のジェシカに裏切られてしまうのである。前述のヤコブは妻子と財産を伴ってラバンの下から出奔したとき、妻ラケルはラバンの家の守り神テラフィム (teraphim) を盗み出しラクダの鞍の下に隠した。テラフィムは、その所有者が家の所有権を持つ重要なもので、ラバンは必死で守り神を探すがラケルがラクダに乗っているのを見つけることは出来なかった。ヤコブはラバンに今まで受けた仕打ちを語り、イサク (Isaac) の神、アブラハムの神が味方してくれなければ、あなたは無一文で私を放り出したであろうと語る。イサクの家から身一つでラバンの所にやってきたヤコブは、今や妻子たちと二群れの家畜を手にし、ラバンに物申せる立場となったのである。ずっと虐げられてきたシャイロックも同様に、貸金業で財を成し、キリスト教徒の命を担保に取るまでになった。しかしヤコブとシャイロックの違いは、ヤコブの場合は、ユダヤ教徒間でラバンが支配的な立場にももの言わせヤコブに忍従を強いるのに対し、シャイロックの場合は、宗教を原因として多数派のキリスト教徒がユダヤ教徒を貶めるという違いがある。

シャイロックからキリスト教徒に移動したものは金銭だけではない。娘ジェシカは駆け落ちという形で移動している。シャイロックはジェシカが一晩で80ダカット浪費したとテューバルから聞いて、“I shall never see my gold again.” (3.1.100-01) と悔しがる。彼にとってその金貨はただの金ではなく、彼の所有物であり、ヤコブを師とする商売理念の賜である。更にシャイロックは、彼が妻レアからもらった宝石を、ジェシカが猿1匹と交換したことをテューバルから聞く。宝石はシャイロックにとって大切なものであることは、ジェシカも分かっていたはずである。彼女がそれをあえて、無価値なものと交換した。ジェシカはそうすることによって、父と、そしてユダヤ人としての自分と決別しようとしたのである。このようにジェシカはキリスト教徒に騙された訳でなく、自分の意思で父の商売理念の賜である金品を持ち逃げし、父を散々侮辱したキリスト教徒と駆け落ちしたのである。父の多額の資産を持ち逃げしたジェシカは、ロレンツォ (Lorenzo) と共にシャイロックの資産を受け継ぐことになった。シャイロック、ラバン共々娘に裏切られる父、という立場であるが、ラバンの場合は、娘たちが夫ヤコブの元に留まることを望んだのに対し、シャイロックの場合は父親からキリスト教徒である結婚相手へと財産が娘諸共、父にとって不本意な形で移動している。シャイロックは娘のことを、“I say my daughter is my flesh and blood.” (3.1.33) と自己の分身のように思っており、自分の体の一部分がキリスト教徒に渡ってしまうかのように感じたと同様に解することもできる。このように財産の移動から考察すれば、キリスト教徒の勝利で大団円を迎えている。ユダヤ人に対して市民感情が良くなかった時代に演じられたことからすれば、観客には一定の満足を持って受け入れられたものと思われる。

しかしシャイロックがそのように儲けた資金は、最終的に慈雨である「マナ (manna)」(5.1.293) に例えられ大団円を迎えている。それはキリスト的慈愛の勝利と言えるのであろう

か。高利貸しがしばしば“usury”呼ばれているように、中世から続く教会法では利子を得る者は、神の教えに反する者として忌避されてきたが、16世紀以降、利子は合法となり、“usury”は高利を意味するものとなった。『ヴェニス商人』ではシャイロックは利殖による儲けのことを徴利(usury)とは呼ばず儲け(usance)と呼び、対するアントニオの貿易のことは投機(venture)と呼ばれている。シャイロックにとって、利子は禁忌されるものではなく、商売上の正当な利益である。一方、アントニオは欲を満たすために投資をしているという明確な場面は見られないものの、彼の資金はより大きな利益のために、運悪ければ破産するリスクを冒しながらほぼ全財産が投資されている。アントニオのもう一つの“venture”はバサーニオの保証人となったことである。そもそもバサーニオが放蕩の末に金を使い果たし、起死回生を狙って、金持ちの女主人ポーシャに結婚を申し込むためにアントニオが保証人となり、シャイロックに金を借りることになったのである。バサーニオの求婚のための資金はポーシャとの結婚を現実のものとし、より大きな利益を得るためにシャイロックから借りた金が投資されたものである。

ルネサンス演劇ではユダヤ人高利貸しは、ことあるごとに強欲な役柄で登場する。しかし本劇ではキリスト教徒バサーニオの放蕩が発端となって友人が保証人となって金を借り、その命をユダヤ人高利貸しに担保に取られるが、それをキリスト教徒が証文を逆手にとりユダヤ教徒から元金どころか財産まで掠め取るという展開となっている。非難されるべきは、ルネサンス演劇の定番であるユダヤ人高利貸しの強欲さではなく、むしろキリスト教徒の放蕩の始末をユダヤ教徒の資金で片付けようとしたことである。キリスト教徒と結婚したシャイロックの娘にその金が渡ることで、“devil”、“cut-throat dog”と呼ばれた高利貸しシャイロックの金は「慈雨」と呼ばれるようになった。そのような金の浄化は、シャイロックの改宗が魂の救済ではなく、彼のユダヤ人としての誇りを奪うものであると同様に、キリスト教徒にとり都合の悪いものを体裁よく美化するものである。

## 6. おわりに

アントニオが借金を申し込んだ時点では欲と憎しみの象徴であった金銭は、シャイロックの手を離れキリスト教徒へと移動した。その金銭は裁判を経て、ロレンツォとジェシカへ移動する過程で、天からの慈雨であるマナと呼ばれるようになり、キリスト教徒的慈愛に満ちた金銭へと変質していった。本劇は金にがめついユダヤ人金貸しと、聖書に依拠した考え方を守る友情に厚いキリスト教徒の間で、後者が勝利するという話として捉えられがちであるが、ヤコブを師とする商売理念の賜物であるシャイロックの金銭は、キリスト教徒バサーニオの放蕩の後始末と、あわよくば彼が金持ちの女性との結婚し、より大きな資産を手に入れるための投機資金として使われているのである。

シャイロックが貸金業で得た利益は、ヤコブが狡猾な支配者ラバンに対し、知恵と工夫で増やした羊と同様に、神の加護の下、日々の商いで手に入れた儲けである。そのような彼の商売上の考え方を背景とするならば、彼にとって金銭は、家畜と同様、知恵と工夫で増やすことの出来る富である。増殖するものは貨幣だけではない。本劇では娘が財産の増殖や移動に重要な役割を果たしている。女性を手に入れることは自己の資産が増えることである。女性も貨幣と同じく流動性を持つが、シャイロックの娘ジェシカは貨幣や家畜とは異なり、自分の意思で移

動している。ただ彼女の場合は、キリスト教徒と駆け落ちしており、単なる娘と金銭の移動には止まらず、キリスト教のユダヤ教に対する優位を印象付けるものである。

本劇は金銭的な軋轢が主要テーマであるが、そこに読み解けるものはキリスト教徒が、利殖という伝統的なキリスト教の教えにとって都合が悪いものを、いかに彼らの道徳的優位を損なわないように処理するかということである。ユダヤ人は当時のロンドンでは、ほとんどその姿を見ることが無かった故に、ステージ上では限りなく貶めることも可能であった。しかし、蔑みの対象であったユダヤ人高利貸しが儲けた金銭は、キリスト教徒が一攫千金を狙うための資金として使われているのである。キリスト教徒にとって欲と憎しみの象徴であった彼の金銭は、キリスト教徒と駆け落ちした彼の娘に贈与されることにより、慈悲の象徴となる。本作品では、そのように金銭が所有される相手によって所有者に都合よくその性格が変わる様子を見ることが出来る。また、そのような金銭の移動に隠れているものは、キリスト教徒のご都合主義的金儲けへの皮肉ではないだろうか。

## 注

- (1) ダンテはその著『神曲・地獄編』で、高利貸しを男色者とともに神の自然に逆らった罪で地獄の第七圏に置いている。高利貸しのイメージの多くは中世高利貸しに対するそのような逸話に源を発するものである。
- (2) 利子が自然に反するというのは、1571年に10%を超えない利子が公式に認められた後も心理的な抵抗となり続けた。それは多くの場合、高利貸しという職業を非難する。しかしトマス・ウィルソン (Thomas Wilson) の『徴利論』(Discourse upon Usury, 1572)において「法律家 (Lawyer)」は、「もし利子が自然に反するのならば利子というの普遍的に悪であるはずである、しかしながら神は部外者には利子付きで貸すことを許容しているから、… この世でのおぞましい悪であるということにはならない (For if usurie weare against nature, it should be universallie evill, but god hath said that to a stranger a man may put his money for usury, … there cannot be a greater or more horrible fault upon earth.)」(237) と考える。その考えのとおり、利子は16世紀には容認され、以降、法定の上限を超えた金利のみ「徴利」とされていた。
- (3) 『十二夜』からの引用は、William Shakespeare. *Twelfth Night, or What You Will*, Edited by Keir Elam. Bloomsbury, 2009.による。
- (4) 聖書からの引用は、*The Holy Bible: an exact reprint in Roman type, page for page of the authorized version published in the year 1611*. Oxford UP, 1985. による。一部、現代綴りに直した。
- (5) 『徴利論』へ、R. H. トーニー (R.H. Tawney) はIntroductionを付している。Tawney, Introductionと記す。
- (6) 狩猟犬はhoundと呼ばれ、侮蔑の対象である犬 (dog) とは区別されていた。
- (7) 『ヴェニス商人』と同時代に演じられた『ロンドンの三貴族と三淑女』(*The Three Lords and Three Ladies of London*, (Robert Wilson, 1590) には、スペイン人や、イングランド人だがロンドン以外の出身である求婚者たちが、三人の淑女に結婚を申し込むが拒否される様子が演じられている。イングランドの人々、特にロンドンの人々の、他地域に対する優越意識の一端を見ることが出来る。
- (8) 『ロンドンの三淑女』からの引用は、Robert Wilson. "Three Ladies of London." *Three Renaissance Usury Plays*. Edited by Lloyd Edward Kermode. Manchester UP, 2009.による。
- (9) Coodintはアントニオをラバンに例えている (129)。アントニオとシャイロックはラバンとヤコブのように主従関係があるわけではないので、類似を見いだすのは難しいであろう。
- (10) シャイロックの妻レアはヤコブがラバンに騙されて結婚した最初の妻と同名である。ヤコブは後に意中のラケルと結婚するが、レアとの間に子を成している。不本意ながらも与えられたものを受け入れ、辛抱強く機会の到来を待つヤコブとシャイロックとを重ねてみることもできよう。
- (11) ewesがユダヤ人Jewsと発音が似ており、ユダヤ人シャイロックはここでも金銭と利関連づけられている。(Drakakis 212)

## Works Cited

- Adelman, Janet. *Blood Relations—Christian and Jew in The Merchant of Venice*. U of Chicago P, 2008.
- Coodin, Sara. *Is Shylock Jewish?* Edinburgh, 2017.
- Drakakis, John. "Introduction." William Shakespeare. *The Merchant of Venice*. Edited by John Drakakis. Bloomsbury, 2010.
- Gross, John. *Shylock: A Legend and Its Legacy*. Touchstone, 1994.
- Gross, Kenneth. *Shylock Is Shakespeare*. U of Chicago P, 2006.
- Hawkes, David. *Shakespeare and Economic Theory*. Bloomsbury, 2015.
- . *The Culture of Usury in Renaissance England*. Palgrave, 2010.
- Jones, Norman. *God and the Moneylenders: Usury and Law in Early Modern England*. Blackwell, 1989.
- Kermode, Lloyd Edward. *Aliens and Englishness in Elizabethan Drama*. CUP, 2009.
- Landreth, David. *The Face of Mammon: The Matter of Money in English Renaissance Literature*. Oxford UP, 2012.
- Marlowe, Christopher. *The Jew of Malta*. Edited by N. W. Bawcutt. Manchester UP, 1978.
- McNeill, William H. *Venice: The Hinge of Europe, 1081-1797*. The U of Chicago P, 1974.
- Scheidlin, Raymond P. *A Short History of the Jewish People*. Macmillan, 1998.
- Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. Edited by John Drakakis. Bloomsbury, 2010.
- . *Twelfth Night, or What You Will*. Edited by Keir Elam. Bloomsbury, 2009.
- Shapiro, James. *Shakespeare and the Jews*. Columbia UP, 1996.
- Sheerin, Brian. *Desires of Credit in Early Modern Theory and Drama*. Routledge, 2016.
- Shell, Marc. "The Wether and the Ewe: Verbal Usury in *The Merchant of Venice*." *The Kenyon Review*, Autumn, 1979. New Series, Vol. 1, No. 4, pp.65-92.
- Sinsheimer, Hermann. *Shylock, The History of a Character*. Benjamin Bloom, 1968.
- Spencer, Eric. "Taking Excess, Exceeding Account: Aristotle Meets *The Merchant of Venice*." Edited by Linda Woodbridge. *Money and the Age of Shakespeare: Essays in New Economic Criticism*. Palgrave Macmillan, 2003, pp.143-158.
- Tawney, R.H. "Introduction." Thomas Wilson. *A Discourse upon Usury*. Edited by R. H. Tawney. Frank Cass & Co. Ltd.: 1925.
- . *Religion and the Rise of Capitalism*. New Brunswick: 1998. Originally published in 1926 by Harcourt Brace and Co. Inc.
- Unterman, Alan. *Jews, Their Religious Beliefs and Practices*. Routledge, 1981.
- Wilson, Robert. "Three Ladies of London." *Three Renaissance Usury Plays*. Edited by Lloyd Edward Kermode. Manchester UP, 2009.
- Wilson, Thomas. *A Discourse upon Usury*, with A Historical Introduction by R. H. Tawney. Frank Cass & Co. Ltd, 1962.
- Woodbridge, Linda, ed. *Money and Age of Shakespeare: Essays in New Economic Criticism*. Palgrave Macmillan, 2016.
- Yaffe, Martin D. *Shylock and the Jewish Question*. The Johns Hopkins UP, 1997.
- The Holy Bible: an exact reprint in Roman type, page for page of the authorized version published in the year 1611*. Oxford UP, 1985.
- アキナス, トマス 高田三郎 (他) 訳『神学大全』創文社, 1960.
- アリストテレス 山本光雄 (他) 訳『アリストテレス全集 15 政治学 経済学』岩波書店, 1969.
- 大黒俊二『嘘と貪欲』名古屋大学出版会, 2006.
- ダンテ『神曲 地獄篇』河出書房新社, 2008.
- 西尾哲夫『ヴェニス商人の異人論』みすず書房, 2013.
- 聖書 新共同訳. 日本聖書協会, 1987.

